【奨励賞】

耳の聞こえないおじいちゃんおばあちゃん

甲賀市立水口中学校１年　大原　凜恋

私の家族には障害のある人がいます。実際に私が障害のある人と関わってきて体験したことや思ったことをこの人権作文に書きたいと思いました。

私のおじいちゃんおばあちゃんは耳が聞こえません。もちろん耳が聞こえないと不便なこともいっぱいあります。例えば、人と会話をするときなど耳が聞こえない人は手話をしたり、ジェスチャーをしたり、相手の口を見て聞きとり、会話をする人がほとんどです。聴覚障害者の人たちは、見ためは健常者と変わらないので、耳が聞こえないことに、きづきません。おばあちゃんと一緒に、お買物に行ったときに、コロナがはじまってから、マスク生活になって、お会計のときにお店の人の、口元が見えなくて何を話しているのか分からなかったり、お店の人が話していても聞こえないので答えなかったら、無視したと思われてしまって、お店の人の態度が変わったりなどよくあり、そのたびに私は、いやだなと感じてしまいます。これも実際におじいちゃんから聞いた話で、高速道路を走っているとき、車が故障してしまったときに、助けを呼ぶのに、困ったそうです。地震や災害のときも、問題が多いです。おじいちゃんの友だちが被災したときの話です。避難所では、耳が聞こえない人はいつご飯がくばられるのかや、他の情報が分からなかったとしても、他の人とコミュニケーションをとれないことやだれかが手話をして、教えてくれることもないので、大変だったことや困ったことがたくさんあったそうです。その話を聞いて、自分のおじいちゃんとおばあちゃんも、耳が聞こえないので、もし地震や災害がおこったとしたら避難所に行ったときに、おじいちゃんおばあちゃんはどうなるのか、不安と心配でいっぱいになりました。他にもいっぱい、日常生活で困ることはあります。道を歩いているときに、うしろから車やバイク、自転車がきてたとして音をならされたり、声をかけられていても、なかなかきづくことができなかったりして、自転車に乗っている人や運転手の人が、困ったり、おこってしまう人など、ときには、事故になりかけそうになったり、あぶないときが多くあります。私が、おじいちゃんおばあちゃんにできることは、お買物のときはおばあちゃんもお店の人も、両方がいやな気持ちにならないように、お店の人がおばあちゃんに何か言ったり、聞いたりしたら私が通訳するようにしています。道を歩いたりするときは、私がうしろをなんども見ながら歩いたり、できるだけ道路側を自分が歩くなどしています。耳の聞こえない人たちが日常生活で使っていてとっても便利なものが何個かあります。一つ目は、ピンポンです。ピンポンは、押すと音がなって分かるけど、耳が聞こえない人たちは音がなっても分かりません。でも、おじいちゃんたちの家のピンポンは、ピンポンを押すと光がつきます。音が聞こえなくても、明かりがつくので分かりやすいです。二つ目は、補聴器です。補聴器とは耳の聞こえない人にとってとても便利な物です。補聴器は、おじいちゃんおばあちゃんがいつもつけています。補聴器とは、日常生活の音を手助けするものです。はずすとまったく音が聞こえなくなるけど車を運転するときはかならずつけています。これは、救急車が

きたときやクラクションに気づくためです。聴覚障害者の人たちは、生活のいろんな場面で便利なものをうまく使って生活をしています。

私たちは、障害があってもなくても、みんなが同じように生きやすくあるべきです。障害がある人はいろんな場面で手助けが必要になります。それは、健常者にも苦手なことやできないことがあるのと同じで、悲しいことや不幸なことではありません。おたがいが思いあって、自然にサポートができる優しい、未来になったらいいなと思います。実際に、病院やご飯屋さんに行って手話ができる人に出会うことが増えました。幼稚園とか歯医者さんとか免許センターなどから、手話を勉強したい、教えてほしいという施設が増えてきて、おじいちゃんも先生として教えにいったりしています。こういう社会に変わってきて障害のある人はとてもよろこんでいます。私も、障害のある人と、ご飯を食べたり交流することがありますが、みんなとても明るくて一緒にいて楽しい人が多いです。障害によってはびっくりする人もいるかもしれないけど、まずは、その人たちのことを知ろうとしてみてください。これからももっと多くの人に手話を知ってほしいなと思います。